

川内川の土木遺産ツーリズムに関する一考察

熊本大学工学部 学生会員 ○藤田将史
熊本大学大学院 学生会員 岩田圭佑

熊本大学大学院 正会員 田中尚人
熊本大学大学院 学生会員 永村景子

1. はじめに

河川法において、治水・利水に加え「河川環境の整備と保全」が位置付けられ 10 年以上が経過した。この間、住民参加や「できるだけダムにたよらない治水」への政策転換など、河川管理の状況も変化している。川内川は、平成 18 年 7 月洪水により甚大な被害を受けたことから、目下「激甚災害対策特別緊急事業」が進められている。河川整備基本方針や整備計画では「川内川の特性等を踏まえ、「川内川らしさ」を活かした河川整備を進め（中略）地域住民の関心を高める」ことが明言されている。また現在、観光立国が国の政策において重要な位置付けにあり、地域の伝統産業や生活文化が旅行者の関心の対象となる時代となっている。

本研究では、川内川の特性を一般市民が認識する導入として土木遺産に着目する。川内川に係る土木遺産はいずれも、当該河川の特性に応じて建設され、流域の人々の生活や生業を支えてきたものと言える。そして、川内川流域における地域づくりの一例として、土木遺産ツーリズムのあり方について考察する。

2. 川内川における土木構造物の現況調査

本章では川内川流域の地形や歴史を把握し、特徴を分析する。また流域内の土木構造物、文化財について現況を調査した。

(1) 川内川の概要

川内川は、熊本県の白髪岳を源とし川内平野を貫流し薩摩灘へと注ぐ、幹川流路延長 137km、流域面積 1,600km²の一級河川である。流域は、比較的下流部まで山がちであり、団子のように川内川に貫かれた平野部に人口や資産が集中し、稲作が盛んである（図 1）。しかし、他の河川に比べ治水対策が遅れ、この平野部では度々、水害の被害にあっている。

(2) 川内川の土木構造物

主な治水系土木施設として、鶴田ダム、湯之尾堰、真幸堰、長崎堤防等があげられる。その他治水事業としては、川内市街部改修事業、菱刈捷水路事業、湯之

尾捷水路事業、曾木の滝分水路事業等がある。利水系農業土木施設には、本流最大の灌漑用水施設である堂本堰と、菱刈平野の灌漑のために建設された湯之尾井堰などがある。

以上に挙げたように、川内川の土木構造物は主に治水、利水に関するものである。地形の特徴から治水施設が必要であり、洪水のたびに改修が行われた。利水においては、稲作が盛んであるため、古くから住民の生活を支えてきた。



図 1 川内川流域図 (参考文獻 2) をもとに筆者作成)

3. 土木遺産ツーリズムの概要

本章では、まず文化遺産としての近代化遺産や歴史的土木構造物などの既存価値を整理し、土木遺産を定義する。またツーリズムについても種類と概要を整理し、土木遺産ツーリズムについて定義する。

(1) 遺産の定義

土木遺産は現在、土木学会選奨土木遺産や、重要な土木構造物 2800 選などにより価値づけられている。しかし、意匠や技術などの優れた構造物中心の評価が多いことから、本研究ではこれを狭義の土木遺産と定義する。加えて、比較的建设年代が新しく、現役供用中の土木構造物についても、建設の背景や歴史、地域との関わりといった系譜的価値を認め、土木遺産とする。以下では、これらを広義の土木遺産と定義し、ツーリズム対象として扱う。

(2) ツーリズムの定義

現在、従来の物見遊山的な観光に対して、テーマ性が強く、体験・学習的要素を取り入れた観光として、様々なニューツーリズムが実践されている（表 1）。また近年では、体験・学習が目的となる「着地型観光」が地域主体の取り組みとして注目されている。このように、ツーリズムとは地域が主体となり、その土地の人や自然、歴史などを体験・学習することを目的とするものである。

表 1 各種ツーリズム

種類	内容	要素						
		自然	歴史	文化	産業 経済	健康	滞在	体験 学習
エコツーリズム	自然・歴史・文化といった地域固有の資源を保護しながら、これらを活かした観光を成立させること	○	○	○				○
グリーンツーリズム	農村や漁村に滞在し、地域の人々との交流や農業体験などを楽しむ旅行のこと	○		○			○	○
ヘルスツーリズム	病氣やけがの治療・療養のほか、美容、ストレス解消など健康増進を目的とした旅行全般をさす	○				○		
ヘリテージツーリズム	近代化産業遺産を保存し活用することで、各種技術や先人の営みを学習・体験する旅行のこと		○	○	○			○

(3) 土木遺産ツーリズムの定義

本研究では土木遺産ツーリズムを、土木遺産を題材に地域の歴史や人々の生活・生業（治水や利水などの）技術を学び、これら土木構造物が支えてきた地域の人の暮らしや生活文化を体験する、ヘリテージ+グリーン（ルーラル）ツーリズムである、と定義する。

4. 土木遺産ツーリズムに関する提案

本章では伊佐市を事例として、流域内での位置付けを分析し、土木遺産ツーリズムについて考察する。

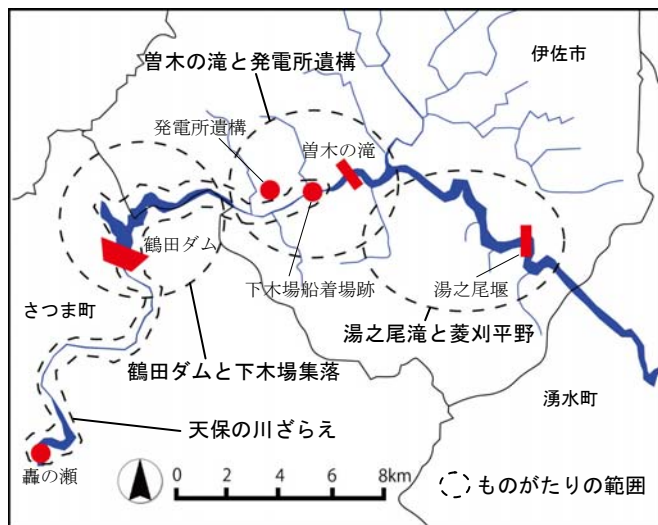


図 2 伊佐市周辺図（参考文献 2）をもとに筆者作成

(1) 川内川流域における伊佐市

伊佐市は伊佐米の名で知られる県内屈指の米どころである。人口は減少傾向にあり、高齢者の割合も高い。川内川の上流域に当たり、菱刈平野・大口盆地を有し、農業が盛んである。湯之尾滝や曾木の滝等の景勝地も存在し、発電所遺構等の歴史的構造物もある。(図2)

（２）伊佐市における土木遺産ツーリズムの素材

1) 天保の川ざらえ：川内川の水路を使って上納米を運搬するため行われた航路開削を指す。景勝地として残る轟の瀬は、その開削の跡である。

2) 曾木の滝と発電所遺構：明治 42 年に竣工し、滝の落差を利用した水力発電が行われていた。またチッソ（株）水俣工場などにも送電されていたが、昭和 40 年に鶴田ダムの完成とともに水没した。

3) 鶴田ダムと下木場集落：昭和 40 年に完成した九州最大の多目的ダムである。発電所とともに活気を帯びていた下木場集落は、湖底へと沈んだ。

4) 湯之尾滝と菱刈平野：江戸時代、広大な菱刈平野の灌漑のために建設された、人口の滝(井堰)である。分水路とともに可動堰が設けられた後は、滝として地域住民に親しまれている。

これらは長年、地域の伝承や思い出として、人々の記憶に残り続けている「ものがたり（コト）」である。またいずれも、川内川流域における暮らしや産業を支えた「土木遺産（モノ）」が現存している。個別のコトや点在するモノも、川内川という軸で繋ぐことにより、「土木遺産ツーリズム」という一つの大きなものがたりとして、新たな可能性を有するのではないだろうか。

5. おわりに

本研究では、土木遺産ツーリズムについて定義し、川内川を対象に考察し、そのあり方を明らかにした。川内川の土木遺産ツーリズムでは、流域の歴史や生活文化を、一つのものがたりとして知ることができる。

[参考文献]

- 1) 建設省九州地方整備局川内川工事事務所:川内川五十年史, 1982
2) 国土交通省九州地方整備局:川内川水系河川整備計画, 2009 3)
国土交通省河川局:川内川水系河川整備基本方針, p. 3, 2007 4) 国
土交通省:平成 21 年度国土交通白書, 2009 5) 大口市郷土誌編さん
委員会:大口市郷土誌[下], 1981 6) 菱刈町郷土誌編纂委員会:菱刈
町郷土誌 改訂版, 2007 7) 大河直躬編:都市の歴史とまちづくり
学芸出版社, pp. 28-40, 2000 8) 国土交通省観光庁観光産業課:ニ
ューツーリズム旅行商品 創出・流通促進 ポイント集, pp. 2-5, 2010